

Ⅲ. 分担研究報告 1

厚生労働科学研究費補助金

医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業

サリドマイド胎芽症患者の健康、生活実態の把握及び支援基盤の構築に関する研究

研究分担者 田上 哲也 (独) 国立病院機構京都医療センター健診センター

§ サリドマイド胎芽症患者の健康、生活実態の把握及び支援基盤の構築に関する研究

研究分担者	田上 哲也	(独) 国立病院機構京都医療センター健診センター	センター長
研究協力者	島 伸子	同上	副センター長
研究協力者	小見山 麻紀	同上	医師
研究協力者	前川 高天	同上	医師

研究要旨

当院では、前研究班の時から合わせると、男性 15 名、女性 31 名の計 46 名の検診を行った。そのうち男性 4 名、女性 7 名の計 11 名は当センターで 2 回の検診を行い、のべ検診人数は男性 19 例、女性 38 例の計 57 例（平均年齢 53.1 歳）となった。本年度に限れば、全くの初回が 3 名、当センター 2 回目目が 3 名、初回国際医療研究センターの再診が 1 名であった。

- これまでに当センターで行った全例の検診結果について総括する。
- まず、高血圧症 6 名（男 2，女 4），糖尿病 3 名（男 1，女 2），脂質異常症 8 名（男 3，女 5），骨粗鬆症 2 名（女 2），痛風 2 名（男 2）あった。
- 肥満（BMI>25kg/m²）を、男性 1/15 名（6.7%），女性 9/31 名（29%）に認めた。女性のうち 1 例は BMI=34.4 の中等度肥満（2 度）であった。うち 1 名は前回 BMI26→今回 23kg/m²（60→53kg）と減量されていた。
- ALT 高値（>30 IU/L）を、男性 3/15 名（20%，うち 1 例は改善），女性 4/31 名（13%，うち 1 例は 53 IU/L）に認めた。
- 高 LDL コレステロール（Friedewald 式による）血症（>120 mg/dL）を、男性 8/15 名（53%），女性 19/31 名（61%，うち 2 名は改善）に認めた。高中性脂肪（TG）血症（>150mg/dL）を、男性 6/15 名（40%），女性 7/31 名（23%）に認めた。低 HDL コレステロール血症（<40mg/dL）を男性 1/15 名（6.7%）に認めた。
- HbA1c（NGSP）高値（>6.2%）は、男性 2/15 名（13%），女性 3/31 名（10%）に認めた。
- 高尿酸血症（>7.0 mg/dL）を、男性 7/15 名（47%，うち 1 例は 8.3 mg/dL）と女性 3/31 名（10%）に認めた。
- CKD（eGFR<60 mL/min/1.73m²）を、男性 1/15 名（6.7%，eGFR=55），女性 2/31 名（6.5%，うち 1 例は eGFR=17）に認めた。
- 骨密度は、腰椎で骨粗鬆症レベル（YAM<70%）が 3 名（男 1，女 2），骨量減少レベル（YAM=70-80%）が 9 名（男 3，女 6），大腿骨頸部で骨粗鬆症レベルが 8 名（男 1，女 7），骨量減少レベルが 16 名（男 5，女 11）であった。
- 血中 TSH 値を測定した 3/29 例（10%）に異常を認めた。2 例（6.9%，男 1，女 1）が軽度高値，1 例（3.4%，女性）が軽度低値であった。

- 考察
- 生活習慣病：当センターで検診を 2 回受けた 11 名のうち 3 名はこの間に何らかの生活習慣病の治療をあらたに開始されていた（2 名は初回からの治療を継続）。一部の受診者で初回検診の結果が治療開始の端緒になった可能性がある。高血圧症、糖尿病、脂質異常症のうち、二つ以上の治療を同時に受けているものが 3 名（男 1、女 2）いた。リスク因子の蓄積は動脈硬化性疾患の発症につながるため、食事療法・運動療法の徹底（強化）が必要である。
- 過体重：サリドマイド胎芽症（以下、胎芽症）患者では、四肢の発達障害だけでなく、外出が億劫になりがちであることなどから、過体重になりやすいことが想定される。当センターで検診を行った対象者に高度の肥満者（BMI>35）はなかったが、BMI=34 が一人、軽度肥満（BMI>25）に該当する者が 5 人に一人（21%）みられた。今後、高齢化に伴い健常四肢を含めた筋肉量減少（サルコペニア）と、それに伴う基礎代謝低下からくるさらなる体重増加（サルコペニア肥満）が懸念される。各人において、筋肉量を維持する工夫が必要であると考えられる。
- 脂肪肝：ALT 高値とは別に、腹部超音波検査で脂肪肝の所見（肝腎コントラストの増強）を男性 9/15 名（60%）、女性 12/31 名（39%）に認めた。食生活の改善が求められる。
- 脂質異常症：半数以上（25/42 例）に高 LDL コレステロール血症(>120 mg/dL)を認めた。血中 LDL コレステロール値は、150 mg/dL 台が男性に 3 名、女性に 2 名、170 mg/dL 台が女性に 2 名、200 mg/dL 台が女性に 2 名あった。血中 TG は、200mg/dL 台が男性に 2 名、女性に 3 名、300mg/dL 台が男性に 1 名、女性に 2 名あった。脂質異常の持続は動脈硬化症の進展につながる。食習慣の是正や適切な薬物治療が望まれる。
- 糖尿病：HbA1c（NGSP）値が、7%台が 1 名（治療中）、6%台が 4 名（うち 1 名は治療中、別の 1 名は初回異常なし）あった。2 回の検診を受けたほとんど全員で HbA1c 値が上昇しており、今後も観察が必要である。
- 高尿酸血症：高尿酸血症は痛風（発作）の原因となるだけでなく、現在では動脈硬化性疾患のリスク因子の一つと考えられている。
- CKD：eGFR=17 mL/min/1.73m²であった女性では、超音波検査で多発性嚢胞腎の所見を認めた。胎芽症患者では片腎などの形成異常も報告されているが、明らかな形成異常がなくとも、加齢に伴う腎機能低下が健常人より早く進む可能性があり注意（定期検診）が必要である。
- 骨粗鬆症：骨密度から骨粗鬆症と診断されるものは男性 2/15 名（13%）、女性 8/31 名（26%）であった。骨量減少は男性 4/15 名（27%）、女性 14/31 名（45%）であった。骨粗鬆症の危険因子は、内的要因として、①55 歳以上の閉経後女性、②痩せている、③ステロイドを服用している、④糖尿病や甲状腺の疾患を持っている、⑤家族に骨粗鬆症の人がいる、ライフスタイルとして、⑥喫煙者、⑦アルコールの摂取の多い方、⑧運動しない・日光に当たらない、である。胎芽症患者では、特に⑧に注意が必要であると思われる。
- 内分泌・代謝異常：今回は内分泌機能に特に注目した検診は行っていないが、サリドマイド自体に、①耐糖能異常：インスリン抵抗性の増大、②甲状腺機能低下症：添付文書上の頻度は 0.9%、③甲状腺中毒症：甲状腺炎の惹起、④副腎機能低下症、⑤性腺機能低下症といった副次作用が報告されていることから、胎生期における薬物暴露が内分泌系臓器の発生過程にも何らかの影響を及ぼすことは十分考えられる。引き続き調査を行っていく。
- 以上まとめると、
 - ◇ 運動制限からくる肥満症に留意する
 - ◇ 主に脂肪肝による肝機能障害がみられる
 - ◇ 脂質異常症の頻度が高い
 - ◇ 耐糖能障害や慢性腎臓病（CKD）を呈する症例がある
 - ◇ 女性だけでなく、男性にも骨粗鬆症の症例がある
 - ◇ サリドマイド（誘導体）自体が甲状腺機能異常や内分泌・代謝異常を引き起こす
- 消化器疾患検診については本年度分のみ報告する。
 - 胃カメラ：平成 30 年度は 7 名が健診を受け、そのうち 3 名が 2 回目の受診（前回は 2 名が平成 26 年度、1 名が平成 24 年度の受診）であった。1 名は朝食摂取後のため内視鏡検査を実施できなかった。内視鏡検

査を実施した6名のうち、3名が経鼻内視鏡を、2名が経口内視鏡検査を希望され実施、1名は経鼻内視鏡を希望されたが、鼻腔狭小のため経口へ変更した。検査に伴う偶発症は認めなかった。ヘリコバクター・ピロリ菌感染については、7名全員に除菌歴はなかった。内視鏡検査を実施した6名中4名は、胃粘膜萎縮を認めず(C-0)、胃がんリスク層別化検査においても未感染と考えられた。残り2名は内視鏡所見上、萎縮性胃炎と共に、点状発赤・びまん性発赤・粘ちょう粘液付着などのピロリ菌現感染所見を認め、培養検査においても陽性、胃がんリスク層別化検査においていずれもC群であり、ピロリ菌現感染と診断し、要治療(除菌治療)となった。また、内視鏡検査を実施できなかった1名は、胃がんリスク層別化検査にて、ピロリ菌過去感染または現感染と診断されたため、内視鏡検査を含む精査が必要となった。要治療・要精査となった3名は胃がんのリスクがあるため、今後も定期的な内視鏡検査が必要

である。なお、6名全員に胃がんをはじめとする悪性腫瘍を認めなかった。その他、胃食道逆流症(L-A分類 Grade M)を1名、胃粘膜下腫瘍を2名に認めた。

- 腹部超音波検査:7名中2名に脂肪肝を認めた。また、1名は総胆管拡張にて要精査となった。
- 大腸がん検診:便潜血検査は7名中2名が陽性であり、大腸内視鏡検査による精査を勧めた。

- **健康危険情報**

なし

- **研究発表**

なし

- **知的財産権の出願・登録状況**

- 1.特許取得
- 2.実用新案登録
- 3.その他
なし